

木のテーブルにも植物オイルを

木の家に似合うのはやはり無垢の木のテーブル。

オイル拭きで仕上げ、使い込んでいくと、汚れの蓄積もそれなりに味わいになっていきます。

汚れがかなりひどくなった時は、思い切って中性洗剤でゴシゴシ洗い、水でよく洗剤を落としてからきれいに拭き取り、その後でオイルをたっぷりしみ込ませます。この場合、食堂のテーブルならば食用の植物性オイルを使うのがいちばんです。

外部の木部には木材保護着色剤を

外部に使われる木材は、雨風にあたり直射日光にさらされ、さらに腐朽菌やカビ・白蟻の害も受けやすいものです。それから木材を守るには、自然塗料系の木材保護着色剤を塗装することをお勧めします。これは木材表面に塗膜をつくらないので、木目も触れず、木材の調湿効果も失いません。新築時にこの塗装を施し、年数ごとに塗り替えれば、木の良さを永く楽しむことができます。何年ごとかは一概にいえませんが、10年過ぎるまでに1回は塗り替えをするくらいが目安と考えられます。2回目に塗り替えを行う頃は、地表に近いところや水まわりをチェックして、傷んでいる場合は部分的に張り替えを行うなどした上で、塗装を施しましょう。

手軽に拭ける昔の知識、ヌカ袋

木の床に手入れは、掃除機でゴミをとり、しつこい汚れはかたく絞った雑巾で拭きます。オイル拭きしてワックスがけしてある床は、水拭きでも大丈夫です。毎日の手入れとしては、昔ながらのヌカ袋で拭く方法が案外、手軽なものです。部屋の片隅にヌカ袋を置いておき、思い出した時に、床だけでなく柱や建具など部分的に手軽に拭いてみてください。

木は鉄より強い？

木の断面を拡大すると、たくさんの細長い細胞が木の縦方向に壁を立てたような形でびっしり並んでいることがわかります。木が生きている間は、ここをパイプのようにして、栄養分や水分を運んでいたのですが、この構造こそが、木材は横方向に比べて縦方向に強いという理由です。縦方向の強度は横方向の3倍から20倍もあります。木と鉄の強さを比べてみると、スギの縦方向の引張りの強さ cm^2 あたり 900kg ぐらいなのに対し、同じ断面積の鉄の棒では約 5t になり、鉄はスギの5.5倍の強さがあることになります。しかし、スギは鉄に比べて格段に軽く、比重で比べればスギが 0.38 、鉄は 7.8 です。ここで、重さあたりの強度で比べてみれば（比強度といいます）、スギは鉄に比べ4倍近く強度があるのです。つまり、同じ強度の家をつくらうとすると、鉄骨造やコンクリート造の重さは木造の家と比べて、かなり重くなってしまい、確実にコストアップにつながるといえます。

木は熱を伝えにくい。

木に触るとほんのり温かいという経験がだれにもあると思います。たとえば寒い冬の朝、コンクリートの床の上を素足で歩いたら身が縮んでしましますが、木の床ならば平気で歩くことができます。これは、木材は熱を伝えにくいという性質があるからです。熱の伝えやすさは熱貫流抵抗という数値で表されますが、同じ厚さの木材とコンクリートを比べると、コンクリートは木の5倍も熱を伝えやすいのです。これはコンクリートが木に比べて、寒いときには冷たく、暑い時には熱くなりやすいということを意味しています。木は熱を伝えにくい上に、細胞は隙間のたくさんの空気を含んだ構造になっているので、急に熱くなったり冷えたりすることはありません。特に厚みのある木は断熱性も高くなります。厚板の床が気持ちいいのはこのためといえることができます。

木は伸び縮みする。

山から伐り出されたばかりの木には、たくさんの水分が含まれています。かつてはスギを伐採した後、枝をつけたまま山に数カ月放置して、葉から水分を放出する葉枯らし乾燥を行って材を運び出したり、実際に使うまでに半年くらい寝かせて自然乾燥させたりしていました。

このように木が使われるまでにたっぷり時間をかけていた時代には、その時間のなかで木がゆっくり乾燥していききました。葉枯らし乾燥を今もやっている産地もありますが、最近では木材を乾燥室に入れて人工乾燥する方法が多くなっています。木材はある一定以上に乾燥が進むと縮み、逆に水分を吸収すると伸びる傾向があります。この伸び縮みは、木の細胞の大部分が縦方向に並んでいるので、縦の方向にはほとんど縮みませんが、横方向に数%縮みます。よく乾燥して水分が安定した木材ならば、反ったり縮んだり割れたりもし難いものです。

もし乾燥が足りない木材で家を建ててしまうと、木材が乾燥するにつれて縮みや割れを生じる場合もありますから、十分な注意が必要です。

また、木には適切な伐採時期（伐り旬といえます）があることも知っておください。木は春から夏にかけて水分や養分を根から吸い上げて活発に成長しています。つまりこの時期に伐った木は水分や養分が多く、カビや虫害に侵されやすいのです。木の活動が停止している秋から冬に伐った木のほうが木材に適しているといえます。木材になっても呼吸している木は伐採してもそのまま生き続けます。

だから、木材は周囲の湿度に反応して、湿気を吸い込んだり吐き出したりしています。専門用語では「平衡含水率」といいますが、木の水分がある温度と湿度のもとでつり合う木材は安定します。地域や季節など条件によって異なりますが、たとえば日本の平均値としては温度 20 度、湿度 75% の場合、含水率は 15% 程度で安定します。

このような平衡状態にある木材は、梅雨時のように空気中に水分が多い時、その水分は木の細胞の空いた部分に入り込み、逆に冬の乾燥した空気中へは木材の水分が飛び出して行き、一定の含水率を保とうとします。これが、湿気を調整するということになります。



このように、木を理解することで、木の安全性や木の素晴らしさと暖かさを見つめて下さい。なによりも私たちの身近な存在だから。